

片岡良一著作集

第四卷

片岡良一著作集

第四卷

中央公論社

片岡良一著作集 第四卷

定価二二〇〇円

昭和五十四年十一月十五日印刷
昭和五十四年十一月二十五日発行

著 者 片岡良一

発行者 高梨 茂

印刷者 山田 博

発行所

中央公論社

東京都中央区京橋二一八一七
電話(五六一)五九二一一九

振替東京二二三四
©一九七九 検印廃止

片岡良一著作集

第四卷

現代文学諸相の概観

目次

現代文学諸相の概観

はじめに

第一章 個人主義文学の輪廓とその淵源

第一節 個人主義文学の輪廓

第二節 個人主義文学の特質

第三節 個人主義文学確立までの歴史

思想的背景 手法的背景 尾崎紅葉の死

第二章 自然主義の文学

第一節 自然主義文学の特質とその発展

第二節 主なる作家

前期自然主義の人々 確立期の人々 自然主義文学の分化と分化期の人々

第三節 自然主義思潮の影響

一五

第三章 自然主義文学に対する反動の諸相

一五

第一節 反動文学の諸相とその特質

一七

第二節 余裕派から享楽派への展開

一六

この派の特徴と展開の経路 主なる作家

第三節 唯美派——頽廃派

二〇

この派に現れた諸傾向 主なる作家

第四節 新理想主義の文学

二三

新理想主義の二派 白樺派の主張と主なる人々
新理想派作家 新理想主義文学の屈折

その他の

第五節 詩壇の新しい蕩揺と戯曲興隆の兆

二七

第四章 新現実主義の文学

二七

第一節 新現実主義の由来とその特質

二七

第二節 新現実主義の諸流派と主なる人々

二八

第三節 時代の詩壇と戯曲壇とへの瞥見

二九

第五章 個人主義文学の行き詰りが生んだ諸現象

二九

第一節	新しき様式への関心及びその他の現象	二五四
第二節	新感覚派の特質	三〇三

補論

一	「自助論」から「名工柿右衛門」へ	三二五
二	幸田露伴の位相	三三二
三	高浜虚子論	三五二
四	葛西善藏の復活	三六三
五	鏡花の世界とその限界	三六六
六	島村抱月の評論	三六一

編集後記

現代文学諸相の概観

はじめに

第一章 個人主義文学の輪廓とその淵源

第一節 個人主義文学の輪廓

第二節 個人主義文学の特質

第三節 個人主義文学確立までの歴史

第二章 自然主義の文学

第一節 自然主義文学の特質とその発展

第二節 主なる作家

第三節 自然主義思潮の影響

第三章 自然主義文学に対する反動の諸相

第一節 反動文学の諸相とその特質

第二節 余裕派から享楽派への展開

第三節 唯美派——頹廢派

第四節 新理想主義の文学

第五節 詩壇の新しい蕩揺と戯曲興隆の兆

第四章 新現実主義の文学

第一節 新現実主義の由來とその特質

第二節 新現実主義の諸流派と主なる人々

第三節 時代の詩壇と戯曲壇とへの瞥見

第五章 個人主義文学の行き詰りが生んだ諸現象

第一節 新しい様式への関心及びその他の現象

第二節 新感覺派の特質

はじめに

「自然主義以後の現代文学について概観せよ、可及的多くの作家に触れて」——そういう命令の下にこの稿の筆は執られた。したがって表題にいう「現代文学諸相」という言葉は、当然自然主義以後の個人主義文学一般と、無産派文学とのすべてを含んでいるはずだ。自分もむろんその意志で、——本文に現代文学という言葉が少く個人主義文学という言葉が多いのはそのためだ——幾らか無産派文学の方面の材料なども、用意したのであったけれども、書き出してから意外に日数を要してしまつたために——それはむろん微力のためであつたとともに、一面自分の紙数に対する予測を誤つて、書くという仕事に取りかかったのがやや遅かつたためであつたのだが——個人主義文学さえ、見られるとおり、十分には眺め渡しきることができないうちに、原稿の締切日を過ぎて

しまふというようなことになってしまったので、無産派の方は全然割愛してしまつた。いつか改めて書き纏めてみるつもりではいるが、その点、編集者にも、大方の人にも、申しわけないことに思う。また現代文学諸相の概観という以上、この稿は、当然こうした形以上に、詩歌、戯曲、評論、随筆、少年文学等のいろいろな面をも、もう少し大きく纏め上げなければならなかつたはずだ。藤村先生からの命令もむろんその点に触れていたし、自分としてもできるだけはやつてみるつもりで——その実はなはだ頼りなかつたのだけれども、とにかくはじめの予定では、第二章第三節などのような部分は、それぞれ独立した一章にするつもりだったのが、自然派分化期の作者論など書いている頃に、先生からはじめにお話のあつた締切日が、間近になってしまつたため、狼狽してこの稿のような形のものにするにしまつたのだ。それもなはだ申しわけないことに思う。

なお自分の気持として、ここに書きたいことが多いのだけれども、余り弁解し過ぎるのも変なものだと思ふから止める。ただこの稿の「現代文学研究」として、形式の上に不備なところの多いのは、すべて自分の微力と失

敗と予測を誤ったことのためであることを、判然させておくだけで。

第一章 個人主義文学の輪廓とその淵源

第一節 個人主義文学の輪廓

明治の新文学は、その三十年代の後半に起ってその末葉から四十年代のはじめに確立された自然主義文学によつて、最後の飛躍をなし遂げた、Strun und Drang——自然主義文学の誕生を思ふ者は、いつでもその陣痛の烈しかったことを思わせられる。明治二十七、八年戦争の後頃から、三十年代にかけての烈しい時代的蕩揺。その蕩揺の最後に結成されたものが、すなわち自然主義的思潮であり、したがって自然主義文学であつたのだ。その時代的蕩揺の間に芽組み成長してきた個人主義的思潮へ

の明瞭な把握。その把握に立脚して伝統的なものの一切を破壊せんとした運動。それが自然主義文学運動であつたのだ。云わばそれは、過去を支配した封建道德的な一切への反逆であり、同時に新しき個人主義的思潮のための行進曲であつたのだ。少くとも個人主義道德樹立のための、前奏曲であつたのだ。陣痛も烈しからざるを得なかつたわけだと思ふ。

ところで、そうした陣痛に喘ぎながら新しく産み出されたものの常として、自然主義文学も、その誕生の当初においては、その人生派的熱情において極めて熾烈であつた代りに、その作品構成の上では、極めて粗雑な、芸術的香味に乏しいものたらざるを得なかつた。が、彼によつてその基礎を固められた個人主義文学は、その後明治の末年から大正十五ヵ年の間を、結果的に云つてではあるが、とにかく予定された階段を一步一步と踏み上つてきたような、極めてノーマルな発展の跡を示しつつ、大正末期の新感覚派文学に到達するまでの間に、漸次に芸術的な洗練と雅醇の味いとを増して、ついに人生派的意図を孕んだ野暮さの一切を、完全に擺脫するところまで発展してきた。それが、云うならば個人主義文学発展

の歴史だったのだ。芸術は——特に散文芸術は、この人生派的意図と、芸術派的意図との、それぞれの極限の間に介在するものだ。したがって、一つの散文芸術運動が、その両極限の一つの果から他の果までを闊し尽した時、その運動の周期はまず終わったものと見ていいのではないかと思う。そこになお残された周期があるとすれば、それはただ転落の過程だけではないかと思う。例えば、新感覚派文学運動に継起して、通俗小説全盛の時代が来ようとしているというような。そう思うと、自然主義によって捲き起された個人主義文学運動の、発展——と云って悪ければ、上昇と云ってもいい——過程も、どうやら経過し尽されたのではないかと考えられる。新興無産派作家などが、口を揃えて云うように、それは当然清算さるべきところまでできているかも知れない。

が、そう一口に片づけてしまっただけでは、個人主義文学の輪廓が、あまりに簡單明瞭になり過ぎてしまう。それは、そうした一区切の中を、極めてノーマルな発展の跡を示してきたものであったには相違ないとしても、そこにはむろん幾度かの屈折と変転とが認められるのだから。見たまえ、自然主義文学の直後には、その直接の

延長とも、また反動とも目される、いわゆる新浪漫主義文学の時代がきた。自然主義文学全盛期に、ややこれと対立するような形にあった一派の流れも、この新浪漫主義文学に合流した。その新浪漫主義の一分派が、新しき意志と理想に生きようとして、新理想主義の文学を樹立した。キリスト教思想に養われた人々その他が、これに歩調を合せた。その間にも、自然主義文学は決して潰えてしまったのではなかった。三派鼎立——ちよつとそういった感じの文芸界のありさまだった。が、結局、そのいずれもが、他を圧倒して文芸界の主流となるまでには、進んでいかなかった。かえって三者が間もなく合流するような形になって、個人主義文学はその頂点期に達した。自然主義文学は、主として知に依存する文学だった。新浪漫主義は情の文学だった。新理想主義は云うまでもなく意志の文学だった。その三者が合流して、人世と人間のあらゆる断面を、あらゆる角度から眺め尽そうとするとともに、そうして眺め尽された人世と人間とをしみじみ味わい楽しもうとするような情勢が馴致されて、意志の激しさが鈍磨されたかわりに、作品の芸術的な彫琢に非常な努力が費されるようになってきた。いわゆる新現

実主義の時代が来たのだ。後の新感覚派を待たず、実はここまできた時すでに、個人主義文学は洗練と雅醇の頂点に達したのだった。芸術至上の空気も、すでにその時、色濃く醸し出されていたのだった。が、そうした頂点期が、もとよりいつまでも続いていくはずがなかった。文芸界はやがて行き詰った。一種の無風帯が現出した。そうして、その無風帯の空白を埋めようとして、隨筆その他の中間的読物の隆昌や、いわゆる大衆文学の擡頭などという現象が現れた。従来ともすれば特殊な世界を形成していた趣のあった文芸界に、広い社会に生きる人々が、せめてもの新しい刺戟を注入すべく、進出してもきた。

通俗小説の問題もやかましく論議されはじめた。しかもそれらの諸々は、多く文芸の質を低下させるだけで、文芸界そのものの沈滞を打破し得るまでの力は、もっていなかった。そこに文芸界そのものの苦悶があった。その苦悶が、旧来の芸術至上主義の思潮に激しく作用されて、作家達の関心を、多く表現上の新工夫にむけさせた。表現派、構成派、ダダイズム——そんなものの多くが、いろいろと論議もされれば、摂取もされた。揚句に、徹底主観主義とも一種の表現主義とも目される新感覚派が擡

頭したのだった。その点で、新興無産派文人の誰彼が、新感覚派文学は個人主義文学行き詰りの苦悶の喘ぎにすぎない、というように云っているのは正しかった。少くともそれは、個人主義文学動搖の飛沫にすぎなかったのだ。だからそれは幾らかの影響を文芸界一般に及ぼすとともに、余り太からざる命脈を繋ぐだけのものになってしまったのだった。が、それにしろ新感覚派は美しい火花だったが、その美しい火花を最後の輝きとして、その後の個人主義文学の流れには、古めかしくもまた微弱な新人生派の主張などが続いただけで、大して高い浪もあがらず、ただ昔ながらの通俗長編小説と、比較的誕生の新しい大衆文学との横流という現象を招致しただけで現在に及ぶとともに、個人主義文学自身、彼自身の過去を振り返って眺め入っているという形の、いわゆる明治大正文学の総決算が、いろいろな形で繰り返されている。

そういうところから、ひいては古典の整理研究というような方面に人々の注意がむけられ、また、一面個人主義文学を見棄てて無産派の陣営に投じようとする作家達の輩出するのに対して、無産派文学の刺戟によって新しくされた思想と眼光によって、個人主義文化の特質とそ

の裡に生活する人々の相とを、新たに見直そうとする氣持を、若干の人々に懷かせはじめたらしく、それらの点から、何等かの新しき氣運の到来を期待させるような氣勢が、ほの見えるようにはなっているようだけれども、それらが果してどの程度まで成長していくかは、もとより予測すべからざる未來のことに属している。ある意味で、新感覺派にその第一歩が踏み出されたとも見られる、個人主義文学のより以上の爛熟が、そこに結果してくるかも知れない。無産派からの直接の刺戟による、新たにされた人生派的理想主義的なものも一度個人主義文壇にも燃え上ってくるかも知れない。そういうものの擡頭が、微かながら見えないのでもないのだから。それらのものが成長していくとすれば、むしろ相当面白いものが見られよう。それがまだ十分予測し得るところまで、判然したものになりきっていないのは、この際、いささか物足りないけれども。

が、そうした予測は、もとより自分当面の仕事ではない。極めて粗雑ではあったけれども、とにかく大体以上で眺め得たかと思われるような輪廓において發展してきた個人主義文学が、果していかなる内包を内包している

かを概観した上で、更にそれらの各断面を、もう少し細かく考察していく当面の仕事を私は急がなくてはならない。それによって、当來の文学への、何等かの暗示をでも掴み得れば、むしろ望外の仕合せだと思う。

第二節 個人主義文学の特質

縦に眺めて大体上述のような流動が辿られる個人主義文学は、これを横に通観した場合、果してどういう特質が觀じられるであろうか。——この点に關する考察は、別に湯地孝氏が細かく触れられるはずだから、私はただ簡単に、私として考える個条だけを、数えていく程度で済ましたいと思う。

そこで、まず第一にあげられなければならない特質は、個人主義文学の時代は小説中心の時代であったという点だ。が、果してしかるか。

土居光知氏はその著「文学序説」において云う。人間が個性に解放される以前には、彼等によって、集團的な成立をもつ伝説や叙事詩の文学が嬖しまれる。が、一度個性に解放されて、彼等自身の意欲が判然認識されるに

至ると、そこにそれぞれの衷情を詠った抒情詩が試みられる。そうして更にその個性解放過程が進展して、表現を意図する意欲が、単なる抒情詩には盛り込みきれなくなるほど複雑になった時、同時に解放の欲びに狂奔した意欲がやや冷静となり、したがってそれに反省的思念が加わりはじめた時に、小説が生れる。その思念が更に複雑となり、結果として対立する思念ないし思想の相剋が生じた時、その相剋を孕んだ事象を力的に展開させるに相応しい形式として、戯曲が栄える、と。多分誤解はないことと思うが、明治の文学は、これを明治の比較的初年から大正昭和の交まで通観してみる時、確かにそうした展開の跡を示しているらしく思われる。すでにその点も土居氏が明瞭に云っていられるように、明治のいわゆる政治小説は、幕末より明治にかけての新興階級者流が、彼等の政治的権力を戦い取るための——あるいは戦い取ったところの事實を、非個人的に記録していった一種の叙事詩的文学であつたに相違ない。そこに描かれたような方法と形とによって、彼等の権力が確保されはじめた頃から、彼等ははじめてそれぞれの個性に解放された。そこに島崎藤村氏などを最も著しき存在とした抒情詩中

心の時代が現出され、その時代に最もよく時潮を代表した人々の心情が、ようやく複雑化して単なる抒情詩には盛り込みきれなくなろうとしたところに、たまたま個人主義思想の横溢があつて、いわゆる個人主義文学の誕生となつたのだつた。自らそれは小説中心の文学とならざるを得なかつたわけだし、少くとも自然主義文学運動は、その当初にあつては、広く一般文芸界のというよりも、むしろ狭く文壇革新のための運動であつたのだ。だから自然派以後の文人と云えば、それは主として小説家であり、彼等が小説家としての道を歩み尽した時、はじめて戯曲全盛期を招来するらしい徴候が、彼等小説家達の力を主として、時代の表面に現れる、という形になつてきたのだ。それを一面作家を離れて云えば、個人主義文学が、その当然の主張の結果として、個人の諦視を意図した、その諦視の徹底したところに、個人の裡における二元の対立が明瞭になつてきた。と同時に、個人の諦視が、やがて個人以上の大きな力への認識を齎らした。それは一方では天の調和とか、自然の運行とか、ないしは運命とかいうような言葉で云い現されるような、そういう性質の超個人力への認識となつた。他方では、飽くまでも